

「社会」の問題点



津 守 真

幼稚園の「社会」ではいったい何を問題にするのかということば私も久しく考えてきたことであつた。いったい「社会」の保育とは社会性の保育と考へてよいのか。あるいは社会のことがらを学ぶことであるのか。社会性という個人の社会的側面に限定されてくるが、もっと相手をふくめた対人関係を考へるべきではないか、などなどの疑問が次々に出てくる。また、実際の幼稚園に接してみると、庭のすみでしくしく泣いている子どもを、先生が通りすぎりに「どうしたの」というだけで、少しも子どもに同情心を示さないので通りすぎながら、部屋の中では高尚な歌やリズムをやっていたりする。幼稚園に入った当座の子どもは、まだほんとうに幼いのである。赤ん坊にほんの少し毛の生えたくらいの子どもを、たくましい少年少女の世界に導入する役目を果すのが幼稚園の時期である。いつも皆で集つて、静かにさせられて、新しい歌や製作を覚えて、それでいながら遊ぶということはほとんどないような生活、それはいつ

たい幼児の生活といえるのだろうかと思ふのである。幼児自身的生活をどこかよそにおき忘れたような上すべりの幼稚園教育であつてはならない。もっと幼児の生活そのものであるような教育の場がほしい。幼児が心からたのしみ、その中で教育が幼児のからだの中にしみこんでゆくような幼稚園がほしい。そのような幼児の生活そのものを研究し、それに必要な教育対策を考へてゆくような場が必要である。それは幼稚園教育全般に通じる課題であると言つてよい。しかし、そこに個々の領域が分化してそれぞれ独自の教育内容を主張し、教育課程が論ぜられてくると、上に述べた幼児の生活はいつのまにかぬけてしまうのである。もちろん、誰でもそれは重要なことと認め、幼稚園教育全体の問題ですよという。けれども、幼稚園教育全体の問題とすることは、逆にいうと、どこでも扱わない問題となりかねない。そこに私は「社会」という領域の特殊な位置を認めたい。「社会」は他の諸々の知識技能領域の中の、社会科

知識を担当する分野ではなく、理論的というならば、幼児の対人関係、対集団関係、対文化関係のすべてを包含するものである。もつと実際にそくしていうならば、幼児の幼稚園生活に対する適応、遊び、友人関係など、幼児の生活に身近な問題と、その教育的配慮に重点をおく領域と考えたい。

さらにまた、幼児期は人間の生活の中でも人間形成の重要な時期であることを考えたい。青少年期になって、いろいろの問題行動を起す場合、性格上の問題、学業の問題、非行など、その動機や原因の一つを幼児期に見出すことは少なくない。逆にいえば、幼児期の取り扱いによって、後の問題行動を予防することができる。そこで問題になることの多くは、母親が子どもをどのように扱うか、先生が子どもをどのように扱うか、問題行動の発端をどのように発見しどのように処置するか、後に問題行動を發展させないための一般的考慮をどのくらい払っておくかというようなことである。このような予防精神衛生的考慮は、幼児教育の強調すべきことである。子どもの生活にそくして、正しい幼児教育を行なうことは、後の問題行動の予防にも役立つ。そして「社会」でこのような点をも正面から扱わなければ、他に扱う場所がない。

以上のような前提のもとに、「社会」で問題になることを整理してみよう。

一、集団生活に適應する

幼稚園に入園して、幼児はまず母親から離れて、新しい場所、知らない先生と多勢の子どもとともに過ごす生活に適應せねばならない。新しい経験をすることに不安が伴うと、子どもは新しい経験に消極的になる。またこの適應ができないと、幼児はいつまでも集団生活の中で自分を發揮することができず、不安定な気持になり、幼稚園がきらいになる率も多くなる。

子どもを母親から離すということは、乳児期には子どもに大きな衝撃を与え、発達全般に及ぼす影響も大きい。幼児期にはむしろ母親以外のおとなの管理のもとで生活するのを学ぶことは望ましい経験といえる。しかし子どもの年齢が小さいほど、母親から離す際に配慮すべきことは多いのであって、それが母子ともに突然の経験とならないように予め準備し、また徐々に離す試み、先生が個人的に接し子どもを安心させてゆくための技術などが必要である。これらの問題に対して、たんに経験的に一定の方式をとるのではなく、個人差などをもあわせて、正面からとりくんで研究してゆくことが必要である。

集団生活に適應するということは、たんに集団のきまりや習慣になじむというだけではなくて、それは子ども自身の自分自身に対する適應の問題でもある。集団生活の中で、自分自身がびったりとした感じをもって、よそにきたという感じではなく、そこに自分の生活があるという感じをもたせることが必要である。それには先生が

子どもを受容するということが重要であって、そのための技術は大きな研究課題である。

二、先生を信頼し、先生と応答することを学ぶ

子どもは先生を通して、他人のおとなを知る。おとなを恐れず、わぶれずに応答し、おとなに対しても自己の本領を發揮して接觸することが必要である。入園当初の子どもは、はじめ先生を独占しようとし、先生に話しかけてこたえてもらいたがる。それから先生に親しみや愛情を示し、先生を信頼するようになる。それから先生が言ったことを考えて応答し、子どもも先生を理解するようになる。先生が子どもを理解するだけでなく、子どもも子どもなりに先生を理解することによって、心の通った教育の場が成立する。ここで先生はどうやって子どもに近づいて、子どもに理解してもらえるかを考えねばならない。

三、他の子どもと遊び、相互に応答することを学ぶ

他の子どもとともに遊び、他の子どもと会話を交し、相互に応答することは、社会で研究すべき中心的なことがらである。幼児が自己の本領を發揮して、思う存分に他の子どもと遊ぶところに幼児らしい生活がある。どのようにしたら子どもも同志で真剣に遊ぶことができるか、それにはどのような材料が必要か、建設的な遊びに發展させるには教師の側には何が必要かと考えることは社会の中心的課題の一つである。また、あるときは相手の子どもに提案し、リード

し、あるときには相手に従うことを学んでゆくとところに社会性の重要な問題がある。数人の子どもも同志で協力して、役割をもって遊ぶことができるようになると、遊びの中に製作や音楽リズム、言語などの題材を折りこんでゆくことができるし、ここでは「社会」が他の保育内容を結び合わせる接着剤となる。

四、集団生活の中で個人の興味を追求する

「社会」で扱うのは常に集団との関連のみではない。集団生活の中で個人生活を保ち發展させることも社会的適応の一つである。他の子どもがまわりにいても、自分の興味のあることをやっていることができるということ、自分のやりかけたことを最後までなしとげられること、自分で興味をみつけてそれに没頭できることは集団生活の中で尊重され、養われなければならないことである。「社会」の中では個人の研究が必須であると考える。また、集団生活の中で突然出合わねばならないフラストレーションに耐えるだけの自我の力を養うことも重要である。個人差をよく認識し、その個人を伸ばすための対策が考えられなければならない。そのために事例研究は幼稚園の「社会」の研究法として重要である。個人の興味をのばすためには、当然、それに応じて教材の研究、空間の考慮、時間の制限に対する考慮などがなければならぬ。

五、集団生活の約束を認識して守る

集団のルールを認識し、集団の一員として行動することは、幼稚

園の後期において問題としてよいことである。もちろん、安全規律のために最低守ってほしいことは、先生が最初によく言ってお守らせるのであるが、それは必ずしも集団意識にもとづくものではない。幼児後期には、子どもは自分のしたことに対する他の子どもへの反応をみることによって、すなわち、話し合いの中で自分にむけられる批判を意識して行動する。また子ども同志が話しあってお互い同志で考え、調整しながら一つの約束をつくり、それに従って行動する能力ができてくる。このような話しあいによって導き、どのような問題に適用できるかは一つの研究課題である。

以上に掲げた四つの問題領域で「社会」の内容の七〇パーセントが含まれると考えてよい。次に述べる二つのことがらは非常に重要ではあるが、量的には幼児の生活のうちの一部分を占めるにすぎない。

六、社会一般の公衆道徳および道徳を身につける

電車やバスの乗降の際に順番を守る、電車の中でおしわけて席をとらない。道路や公園で紙くずをちらかさないというような公共の場所での道徳は幼児のときから守るように訓練せねばならぬことである。しかしこれは幼児だけの問題ではない。母親や先生をもふくめておとな全体の問題でもある。おとなと子どもとの共同の社会生活の中で、おとなと子どもと共に守るべきことがはつきり認識され、ともに努力する方向に向かうことは望ましい。

七、社会知識・社会科学の基礎を学ぶ

これは小学校の社会科に相当する部分である。幼稚園の時期では社会に関する知識体系を教授しようとすることはほとんど意味がない。幼児は身辺の事象には何ごとでも興味をもつものであるから、身近に経営する乗物、店、行事、事件などについて質問し、疑問をもち、書物を見ることを喜ぶ。それは身近なものに対する興味であって、その点では自然に対する興味とまったく同様である。もしも「社会」で社会知識だけを問題にするなら、自然とあわせて一つの領域とした方がよい。幼児にとっては、社会現象でも自然現象でも、体系的知識を与えることはあまり価値がない。むしろ偶然的な機会に疑問をもち、関心をもち、観察し考える機会をもつことが重要なのであり、偶然的機会をとらえて指導する技術を研究することが課題なのである。

以上は「社会」の内容の概略であるが、最初に述べたように、幼児の生活にふさわしい、幼児が全身で生活できるような幼児教育としてゆくためには、どうしても「社会」の研究が盛にならなければならない。それには個人の事例研究が必要であり、また、クラスも一人の子どもと同様に発達し変化するのであるから、クラス全体の動きの研究とはぜひ必要である。幼児の生活と正面からとりくんで、どの子どももそれぞれ自分の力を發揮して生活できるように考えるところに「社会」の中心的課題がある。